
蛍の光は色鮮やかに

taktoto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蛍の光は色鮮やかに

【Nコード】

N2366H

【作者名】

takoto

【あらすじ】

初めての花火大会、君は待ち合わせに来なかった。

三年前：君と出会った。

一年目は何も話せなくて

二年目には友達になれて

三年目に付き合い始めた。

季節は春。鮮やかな桜が僕らの道を綺麗に彩り、
道端の草花は僕らの足元を優しく彩る。

鮮やかな景色を君と眺めていた。

いつまでも君と見ていたいと思った。

「何を考えてるの？」

君のこの質問を、僕はいつもはぐらかし、
笑って誤魔化した。

「そつちこそ何を考えているの？」

僕が問いかけると君も笑って誤魔化した。

穏やかな春の陽気が、優しく僕らを包み込んでいた。

7月に入り、二人で花火を見に行く事になった。

久し振りのイベントに、僕の心は高なっていた。

待ち合わせ場所に着くと、君はまだ着いてなくて、周りが恋人達ばかりで、居場所がない様な気がした。

君は…来なかった。

花火は終わってしまつて、もう誰もいなくなつてぼんやりと空を眺めながら、携帯を握りしめていた。

メールの返事は無くて、電話も繋がらない。

何かあつたのだろうか？不安でたまらなくなる。

自然と君の家に足が向き、一人携帯を片手に歩いた同じ道。

あの時は鮮やかだった風景も、今となつては

一人ぼつちの僕を突き放す様に暗かった。

君に電話を掛ける。 1コール、2コール、3コール…

）

君の着歌が聞こえた気がした。

携帯を鳴らしたまま音の方へ行くと、

知らない誰かとキスをしていた。

「何してるの…？」

思わず声を掛けた。

「…！」

驚いた様子を見せた君。

「誰？知り合い？」

知らない男は君に問いかける。
君は一言、

「知らない」

そう答えて、僕の方を見なかった。
その場を僕は逃げるように立ち去った。

川辺にはもう蛍が飛んでいて、
柔らかな光が滲んで見える。

そのまま僕は川に飛び込んだ。

水の底から見上げると、蛍の光が色鮮やかに映り
そのまま何も見えなくなった。

このまま眠ってしまえば
君は僕を覚えていてくれるだろうか？

そんな事が頭をよぎる。

ドボン…

飛び込む音？

君が助けに来たのかな？

期待とは裏腹に助けに来たのは
近所の伯父さんだった。

「死ぬ気だったのか？」

「いえ、別に。」

伯父さんの問いかけにそう答えた僕を
グーで殴った。

涙が出た。

痛かったからでは無く、伯父さんの気持ち
嬉しかった。

全然知らない人だけど、話を聞いてくれた。
そのまま僕は伯父さんに送られて、家まで辿り着いた。

翌日、君は学校に来なかった。

次の日も…
その次の日も。

それから一週間が経って、君から手紙が届いた。
不思議だった。メールで事足りたはずなのに。

君の家を訪ねると家にいた。

部屋からは一步も出てこない。

君の部屋の前で、僕は君に問いかけた。

「どうして学校に来ないの？」

返事は無かった。

そのままその日は家に戻った。

次の日から君の家に通った。

ドアの前で一方的に話しかけるだけだが、不思議と悪い気はしなかった。

まだ：好きなんだろうな。

自分の気持ちに気づいてはいたけれど、君の気持ち分からない。

何度も何度も君の家に通った。

手紙を書く事にした。

「話してくれるまで待つてる。」

ただ一言添えてドアの下に挟んだ。

メールが届いた。

「声が出なくなって話せない。ごめんなさい。」

なぜなんだろう？病気かな？
考えもせずに返信した。

「どうかした？病気？僕に出来る事はないかな？」

返事は来なかった。

君の部屋の前で、僕は返事を待ちながら
夢を見ていた。楽しかったあの日々を。
走馬灯の様にゆっくりと鮮明に。

携帯が鳴った。君からのメール。

ドキドキしながら開いた。

「花火大会の日、あなたとの約束を破って他の人と会いました。」

ズキツ…と胸が痛んだ。続けてメールが届く。

「あの後…あの男の連れが来て…レイプされた。」

自業自得だ。僕を裏切った君が悪い。

僕はそう返信した。

「自業自得だよ。僕を裏切ってなければそんな目に合わずにすんだ
のに。」

すぐに返事は来た。

「ごめんなさい。」

ただ一言だけだった。

僕はまた涙がこぼれて来た。
ドアの向こうで君は涙を流した。

どれくらいの間が経ったのか。外はもう真っ暗で
僕は帰ろうとした。

君からまたメールが届いた。

「帰らないでくれますか？」

僕は胸が締め付けられる。

このままここに居ても、二人とも何も変わりはしないのではないか？
そう思ったから、君に返事を書いた。

「蛍を見に行きませんか？」

そっと…ドアが開いた。

君は目に涙を一杯溜めて、震えながら僕にしがみついた。

二人でまたあの時の道を歩いた。

以前と同じように二人で歩くのに

どこか遠さを感じて、歩調も速くなった。

君は僕の手に引かれて、同じ速さで歩いた。

今日も蛍が飛んでいる。

色鮮やかに僕らを照らす。

儚く、切なく、優しく…。

僕は君を抱きしめて、君に伝えたかった事を

言葉にした。

「君の事が…まだ好きです。」

君の瞳の涙がこぼれおち、僕は優しくそれを拭う。
そっとキスをして、君をもう一度抱きしめた。

柔らかな蛍の光が辺り一面を鮮やかに染めた。

こうして僕は君とまた付き合う事にした。

僕の心は傷だらけだけど、君の心程では無いから。

だからずっと君の傍で、あの道を寄り添って歩こう。

来年も…また君とこの道を歩いて行こう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2366h/>

蛍の光は色鮮やかに

2011年1月13日14時31分発行